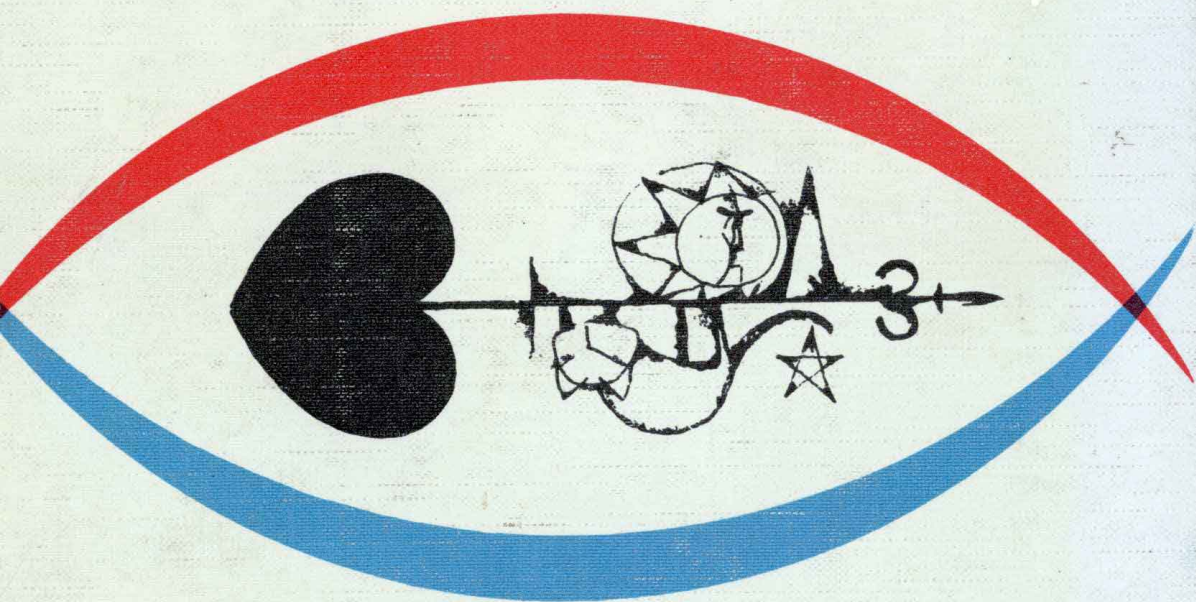


レインボーブックス

子ども文学館



家なき子

原作マロー・大木雄二



省印略

レインボーブックス

NDC 908

子ども文学館 6

家なき子

マロー原作

昭和四十四年二月十日発行

定価四二〇円

著者……………大木雄二・

発行者……………田中博之

発行所……………盛光社

東京都千代田区富士見二ノ十二ノ二
電話東京(二六五)四七八一 振替東京四六八七四

印刷所……………昭文堂印刷所

製本所……………中西製本所

乱丁・落丁本はおとりかえいたします

子ども文学館

家なき子

原作マロー・大木雄二



消印
B05533 図書館

盛光社

編集委員＊川端康成・浜田広介・与田準一・二反長半



川端康成



浜田広介



与田準一



二反長半

編集のことば

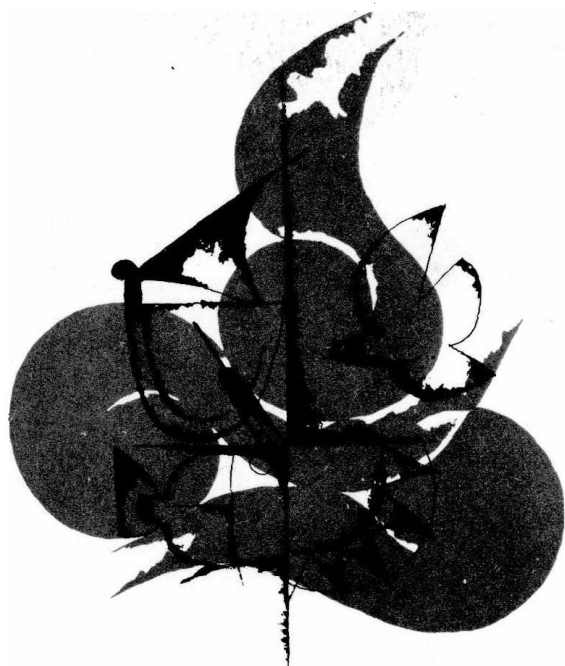
なにごとにも感じやすく、みずみずしい感受性をもった幼少年期は、その人の性格や情操の基礎をつくる一番大切な時期でもあります。

この大切な時期に、香り高い世界の文学にふれることができれば、子どもたちの心は、どんなにか豊かに美しく、しかもものびやかに育つことでしょう。

この「子ども文学館」は、そうした幼い心に、美しい夢と光をあたえることを願って編集いたしました。

著者の先生方には、日本の一流文学者を選び、作品は世界文学の中から幼少年向きのものをとり上げ、それを小学校低学年の児童にもひとりで読めるように、できるだけやさしく書き改めたものです。

もくじ

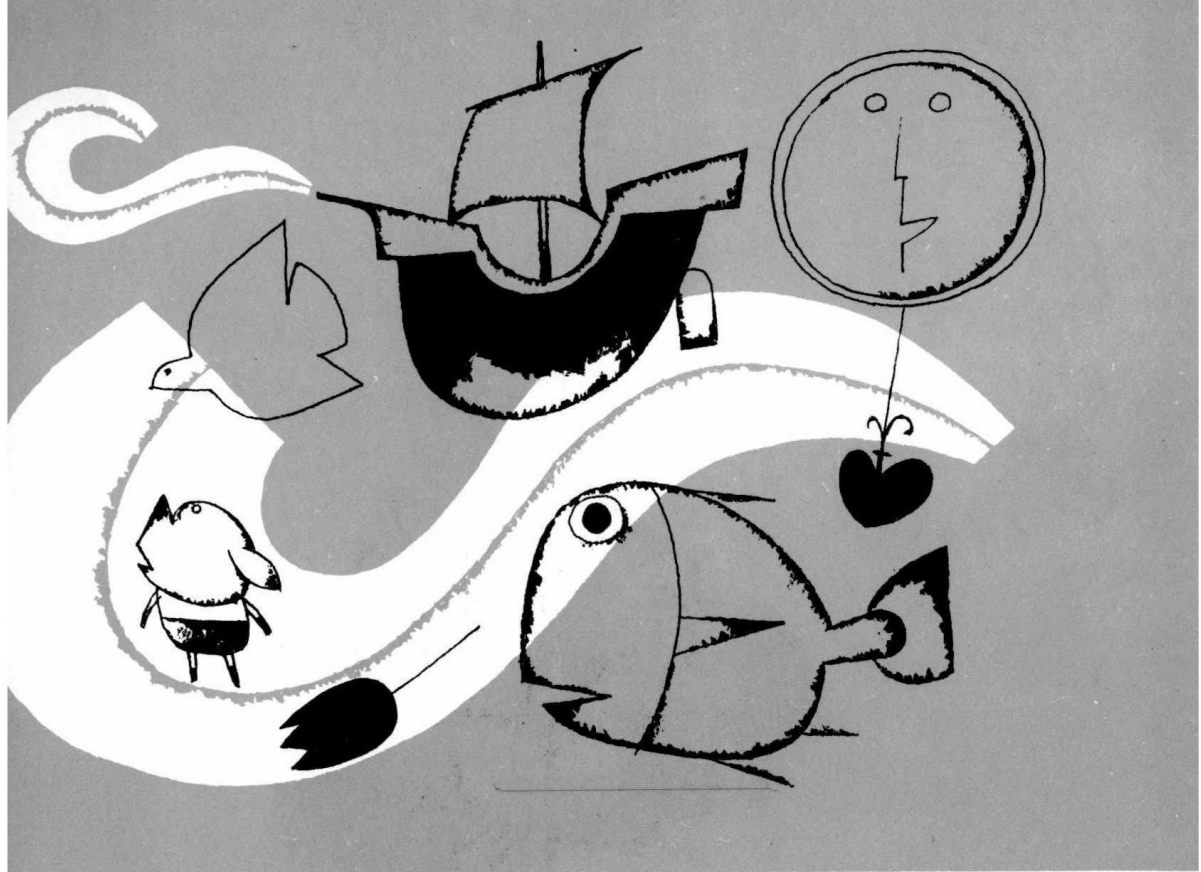


はじめに

そだてのおかあさんとわかれて、ルミはビタリスおじいさんといっしょに、旅をつづけます。ほんとうのおかあさんに、あいたいなあと思ひながら……。

ビタリスおじいさんは旅芸人です。さるのジョリクール、いぬのカビなどが、ルミのなかまです。雪の日も、日でのあつい日も、こちらの町から、あちらの村へと、まいにちやすまず、歩きました。やがて、ビタリスおじいさんが死に、ルミは、ともだちのマチャと旅をつづけます。つらいことも、かなしいこともあります。けれども、すなおな、明るい心をもって、ルミはいつも元気です。

ルミは、ほんとうのおかあさんに、あえるでしょうか。



やさしいルミ
—
8

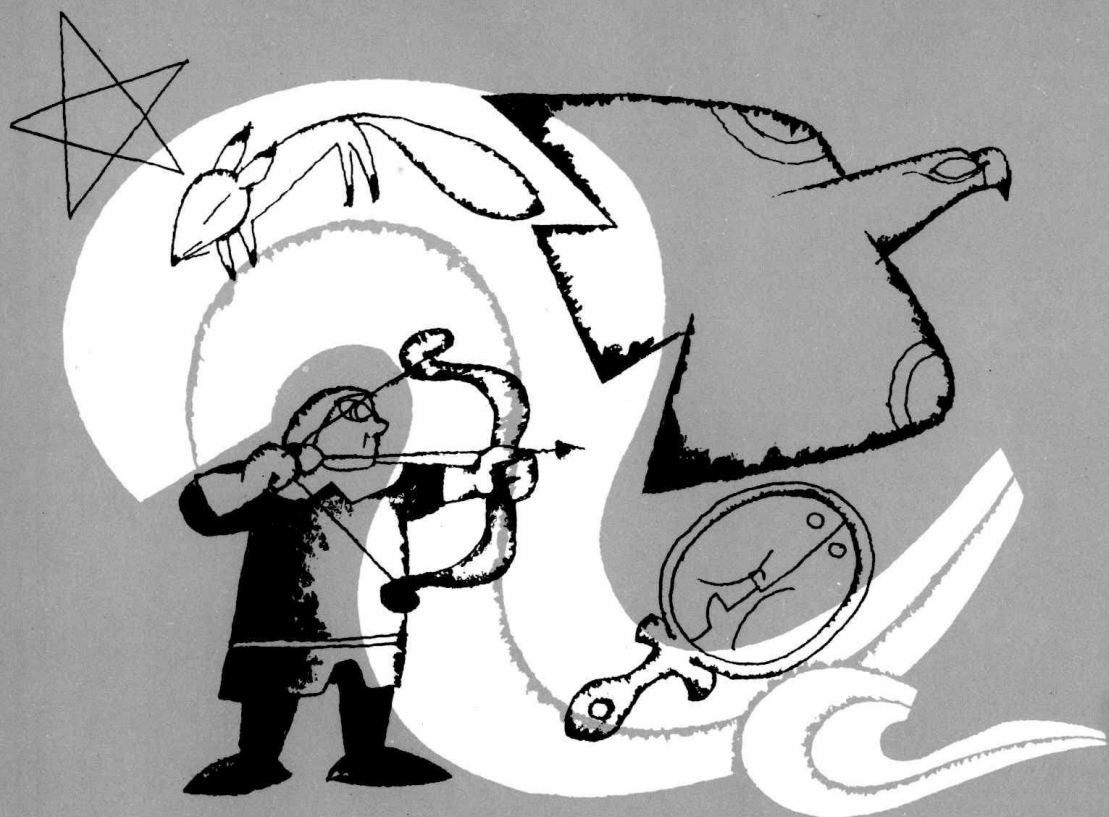
ビタリス一座
—
30

白鳥号
—
46

ふぶきの夜
—
59

ジョリクールの病気
—
70

ふたりでパリへ
—
90



花畑はなばたけのあらし
102

新あたしいなかま
113

みやげのめ牛うし
124

いつわりの父ちち
135

幸こう福ふくなルミ
149

「家いえなき子こ」について
163

●編集委員

作家 川端康成

児童文学者 浜田広介

詩人 与田準一

児童文学者 二反長半

子ども文学館 6 家なき子

●ブックデザイン 若菜珪

●口絵 富山妙子

●さし絵 富山妙子

家なき子

大又
木雄二



やさしいルミ

ルミは八つ、元気なこどもでした。いつもにこにこ顔で、おかあさんの手つだいをしました。め牛のルーセットは、ルミによくなついて、ルミをみると、「モウッ。」とほし草のさいそくをします。

「まで、まで。おとなしくするの、いま、ごちそうをやるよ。」

ほし草をかかえて、牛小屋のほうへいこうとするルミのうしろから、

「ルミや。ちょっと。」

おかあさんの声でした。

「はい。なあに。」

ほし草を、牛小屋になげこむなり、ルミはいそいで、おもやの方へかけだしました。ルミは、おかあさんによばれて、ぐずぐずしていたことはありません。いいえ、よばれなく

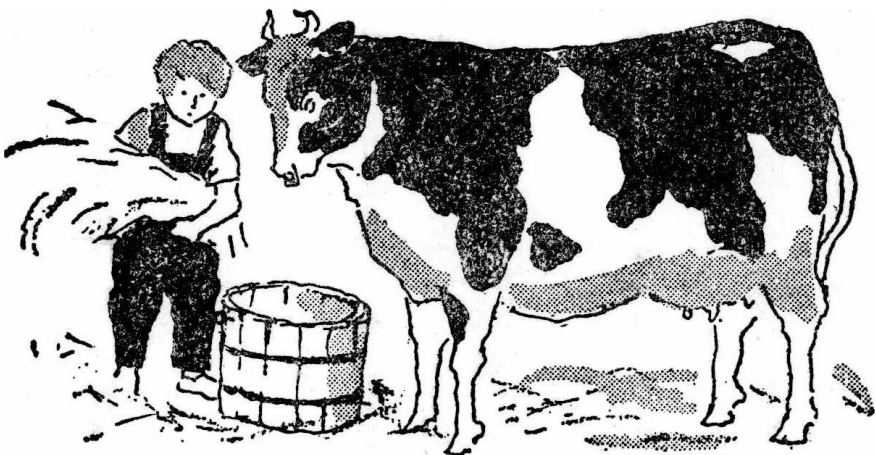
ても、なるべくおかあさんのそばをはなれないようにしているのです。

だれだっておかあさんはすきでしょう。でも、ルミは、だれよりもおかあさんがすきです。ああ、おかあさん。やさしいおかあさん。かわいがってください、世界一のいいおかあさん。

ルミは、おかあさんのことを思うだけで、心があたたまる思いでした。

「なあに、おかあさん。」

こういいながら、家へとびこんだルミは、「おやっ」と思いました。どこかの知らない男が、ルミのほうを見て、にやにやしながら立っていたからです。ルミは、だまったまま、ちよっと頭をさげました。



「このかたはね。」と、おかあさんはいいました。

「おとうさんのお友だちのかたでね。おとうさんのことで、わざわざバリからきてくださったのよ。」

「そうなんだよ。おまえのおやじさんのことだな。」

「そう。おとうさんのことって？」

ルミは、なぜかはっとしました。ルミはまだ、おとうさんの顔を知りません。おとうさんの名はジェローム・バルブレン。うでのたしかな石屋の職人だということです。ルミが小さいころ、このシャバノンの村を出て、バリへはたらきにいったきり、いちども帰ってきたことがないとのことでした。

「おとうさんが、屋根からおちてきた材木にうたれて、大けがをなすったんですって……」
おかあさんは、おろおろ声です。

「そうなんだよ。それでな、いま、ぜん病院にはいつてゐるってわけなんだが、なにしろお金がいるんでね、すぐお金を送ってよこすようにと、こうなんだ。わしがたのまれてきた

用ようというのは、それなんだよ。かわいそうなものさ。お金かねがなけりゃ、ジェロームのけがはなならない。かたわになつてしまふんだからな。」

「いいえ、お金かねならなんとかします。あのひとをかたわにするなんて、とんでもない。」

おかあさんは、いきおいこんでいいましたが、そのあとで、暗くらいさびしい顔かおになるのでした。ルミの家いえはびんぼうです。シャパノンの村むらでも、ゆびおりのびんぼうでした。おとうさんがいないので、おかあさんひとりがはたらいているのですもの、びんぼうはしかたがありません。けれども、おとうさんがけがをして、病院びやういんで苦しくるんでいるというのに、いりようなお金かねをとどけないわけにはいきません。どうしたらいいでしょう。おかあさんが暗くらい顔かおをするわけが、こどものルミにもよくわかるのでした。

「ルミ、おいで。」

おかあさんは、ルミを牛小屋うしどやのほうへつれていきました。

「ルーセットを売うりましょう。そのお金かねをおとうさんにとどけましょうね、ルミ。」
「だって、ぼく。」

それから四、五日のちが、年にいちどのカーニバルのお祭りでした。カーニバルはどこにもきまず。シャバノンの村にもきまず。

ルミが、外からもどつてくると、おかあさんは待ちかねていたようにいいました。

「どこへいつていたの。おいしいごちそうができるのよ。」

「ほんと。ぼくのすきなものつくってくれるの。」

「ええ、大すきなものばかり。ほら、見てごらんなさい。」

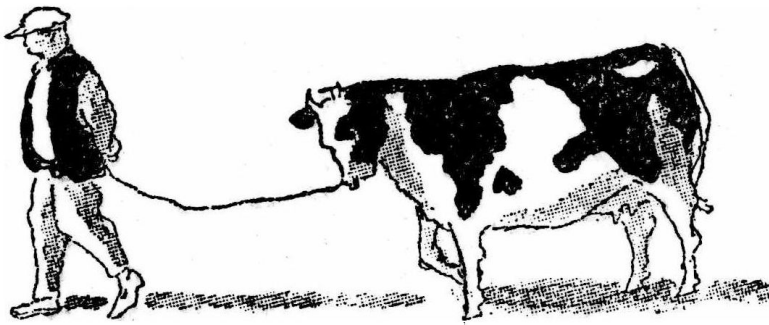
おかあさんは買い物かごをあけました。うどん粉ができました。バターができました。ミルクのはいったびんもありました。おや、まだなにかあります。

「やあ、たまごがあるよ。あつ、りんごの赤いのもある。すてきだなあ。」

ルミは、むちゅうになつてよろこびました。

「ね、うれしいでしょう。ホットケーキをつくるよ。たくさんたべられるわ。りんごはそのあとでいただきますしうね。」

こんなにたくさん品の物が、どこから手にはいったのでしょうか。びんぼうなルミの家に



おかあさんの声は、いつもよりやさしく、ルミのかたにおいた手は、いつもよりあたたかでした。

まもなく牛買いがきました。お金をおいて、かわりにめ牛をつれていきました。ルーセットは、ルミとおかあさんのほうをふりむいて、モウ、モウとなきながら、たづなをひかれていきました。おとうさんの友だちという知らない男は、お金をにぎってバリへもどっていきました。

からっぽになった牛小屋に、夕日があかあかとさしこんでいます。ルミがしょんぼりとのぞいています。ほし草のにおいがします。ルーセットのにおいもします。ルミは、目をそらさないではいられませんでした。

お寺のかねが、夕やけ空にひびきわたってきこえました。みんなが幸福に、みんながおだやかにと、つたえているようでした。

それから四、五日のちが、年にいちどのカーニバルのお祭りでした。カーニバルはどこにもききます。シャバノンの村にもきました。

ルミが、外からもどつてくると、おかあさんは待ちかねていたようにいいました。

「どこへいっていたの。おいしいごちそうができるのよ。」

「ほんと。ぼくのすきなものつくってくれるの。」

「ええ、大すきなものばかり。ほら、見てごらんなさい。」

おかあさんは買い物かごをあけました。うどん粉ができました。バターができました。ミルクのはいったびんもありました。おや、まだなにかあります。

「やあ、たまごがあるよ。あつ、りんごの赤いのもある。すてきだなあ。」

ルミは、むちゅうになつてよろこびました。

「ね、うれしいでしょう。ホットケーキをつくるよ。たくさんたべられるわ。りんごはそのあとでいただきますしうね。」

こんなにたくさん品の物が、どこから手にはいったのでしょうか。びんぼうなルミの家に

は、バターもミルクもないはずなのに。けれど、せっかくのお祭りまつりに、ごちそうがなく
ては、ルミがかわいそうだと思おもったおかあさんが、知しりあいの家いえへいって、わけを話はなして
かりてきたのです。

ホットケーキをつくるバターのおいが、家いえじゅうをいっぱいにしたときです。ドアが
ギーッとあきました。ひげだらけの人相にんそうのよくない男おとこが、ぬうつとはいってきました。

「おい、おれは腹はらがへってるんだ。はやくくいものをだしてくれ。」

どかりとイスにかけて、大おお声こゑでわめきたてました。なんというらんぼうな男おとこでしょう。

ルミはびっくりして、かべぎわまであとずさりをしたくらいです。

「まあ、」と、おかあさんもおどろいたようでした。でも、おかあさんのおどろきは、ルミ
とはちがっていたようです。うれしそうでもありません。

「ジェローム、いつかえったの。ルミ、おいで。」

ルミをよびました。

「おとうさんよ。おとうさんにごあいさつをしなさい。」